

「第 81 回湘南科学史懇話会～宮澤賢治と現代」

2017 年 1 月 29 日（日）14:00～18:00

濱田英作

大地震、経済恐慌、ポピュリスト指導者の出現、やがては戦争へ…。21 世紀現代と酷似する世界情勢下の日本大正時代。その時代は、第一次世界大戦後の価値観転倒により起こった



た風潮に彩られ、まさにわれらが宮澤賢治も、そうした時代の寵児のひとりとして、その存在を読み解くことができる。そうした観点から、あらためてこの現代に生誕 120 年を越えた賢治を捉えなおしてみたい。それがまた、現在の世界の人々の心に蟠っている、集合無意識下に沈殿したルサンチマンを考える契機ともなるかもしれない。

☆なお当レジュメは、講師の長年における早稲田大学エクステンションセンター他、数次にわたる講義、講座、講演の成果と結果より作成したものである。

■講師プロフィール

濱田英作（はまだ・えいさく）：国土舘大学 21 世紀アジア学部教授

1956（昭和 31）年東京生。渋谷区立渋谷小学校卒業。渋谷区立松濤中学校卒業。東京都立新宿高等学校卒業。早稲田大学第一文学部東洋史学科卒業。早稲田大学大学院文学研究科東洋史専攻博士前期課程（修士）卒業。早稲田大学大学院文学研究科東洋史専攻後期課程修了。北京大学歴史系留学、1989 年天安門事件で帰国。静修短期大学助教授、静修女子大学（札幌国際大学）助教授、埼玉女子短期大学教授、国土舘大学アジア・日本研究センター教授、多摩大学非常勤講師、明治大学兼任講師を歴任。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）客員研究者（2012 年）。他に、早稲田大学法学部非常勤講師、早稲田大学エクステンションセンター講師を現任。専門領域は、東洋史、中国史（漢代）、シルクロード史、文化論、宮澤賢治研究。

■執筆一覧

論文

- ・「前漢の河西回廊への進出と諸郡の建置について」（『史観』112、1985年3月）
- ・「西漢における匈奴降者に対する処置について」（『早稲田大学文学研究科紀要 別冊第12集 哲学・史学編』、1985年）
- ・「前漢における剣と争闘」（『史観』125、1991年9月）
- ・「前漢按剣考」（『静修短期大学研究紀要』23、1992年3月）
- ・「前漢の撃剣・剣論・剣客——剣の用途小考」（『静修短期大学研究紀要』24、1993年3月）
- ・「大秦国の国名について」（『内陸アジア史研究』9、1993年9月）
- ・「北海道の活性化についての試論—国際的視野からみた「地域の力」とは—」（『静修学園北海道環境文化研究センター・テクニカルレポート』0011、1994年9月）
- ・「居延辺境における一事件—「前漢における剣と争闘」補遺—」（『静修女子大学紀要』1、1995年3月）
- ・「異文化交流実践報告」（『埼玉女子短期大学研究紀要』9、1998年3月）
- ・「歴史用語「セランド」の文明論的意義」（『埼玉女子短期大学研究紀要』10、1999年3月）
- ・「文明論的に見た近代システム「以後」の教育と21世紀の大学」（『埼玉女子短期大学研究紀要』11、2000年3月）
- ・「文化としての北方—第二北海道としてまなざされたサハリン序説」（平成12年度～平成14年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書 研究課題番号12490001 『文明としての北方—異文化共存の可能性』（研究代表者 梶原景昭）所収）
- ・「Spangenhelm and Scale Armour—日本古墳時代に相当する西アジア～欧州の武具概観」（『古代武器研究』3、2002年12月）
- ・「宮澤賢治の観じた西域—投影としてのアジア像」（『21世紀アジア学会紀要』第2号、国土舘大学21世紀アジア学会、2004年3月）
- ・「水土考」（『東京湾学会誌—東京湾の水土—』2巻5号、2007年3月）
- ・「ユーラシア的コンテクストから見た日本古墳時代武具の位置付け」（菅谷文則編『王権と武器と信仰』（同成社、2008年）所収）
- ・「宮澤賢治と三人の天童子—西域モチーフがいかに重要であったかに関する一考察・「宮澤賢治の観じた西域」補遺—」（『21世紀アジア学研究』第14号、国土舘大学21世紀アジア学会、2016年3月）

研究ノート

- ・「異文化交流実践報告」（『埼玉女子短期大学研究紀要 9』、1999年）

史料紹介

- ・「マルチ・メディア紹介－CD－ROM「セランド」」（『内陸アジア史研究 12』、1998年）

論文翻訳

- ・ゾマーシュトレム「居延地方の地理」（『史滴7』、1986年）
- ・孫機「シルクロードと東西文化交流」（展覧会図録『シルクロードの煌めき－中国・美の至宝』、北海道立近代美術館発行所収、1999年）

論説

- ・「道の魅力」（展覧会図録『シルクロードの煌めき－中国・美の至宝』、北海道立近代美術館、1999年）
- ・「バングラデシュ調査の成果に思う」（『アジアン レター』17、2011年10月）

項目執筆

- ・長澤和俊編『シルクロードを知る事典』（東京堂出版、2002年8月）

翻訳

- ・『NHK大英博物館5 中央アジア・東西文明の十字路』（エッセイ翻訳、図版解説翻訳）（日本放送出版協会、1991年2月）
- ・甘肅人民出版社編『シルクロードの伝説－説話で辿る二千年の旅』（1994年3月）
- ・アニタ・ガネリー著『ヒンズー教』（岩崎書店、1999年）
- ・キャサリン・チャンバース著『シク教』（岩崎書店、1999年）
- ・ディアンヌ・デュクレ著『女と独裁者－愛欲と権力の世界史－』（神田淳子監訳、担当翻訳、2012年4月）

著書

- 『激震の天安門・北京大学からの手紙』（ペンネーム諸山弘）（ペップ出版、1989年8月）
- 『エピソード・稲門の群像125話』（共著）（早稲田大学出版部、1992年）
- 『紺碧要塞の国際論』（共著）（徳間書店、1995年4月）
- 『シルクロード紀行』（共著）（北海道新聞社、1999年6月）
- 『中国漢代人物伝』（成文堂、2002年9月）
- 『21世紀アジア学』（共著）（成文堂、2002年2月）
- 『中国漢代人物伝』（成文堂、2003年8月）
- 『講談社 新シルクロードの旅 第1巻 楼蘭・トルファンと河西回廊 楼蘭王国の謎を探り、葡萄のオアシスを歩く』（共著）（講談社、2005年2月）

『講談社 新シルクロードの旅 第2巻 敦煌・ホータン・イーニン 美と富のオアシスから遙かなる天山へ』(共著)(講談社、2005年6月)

『講談社 新シルクロードの旅 第3巻 西安・カラホト・青海・カシュガル 悠久の古都の路地から、天空の青い海へ』(共著)(講談社、2005年12月)

『リーディングス 21世紀アジア』(共著)(成文堂、2014年4月)

新聞論説

1. 「ホワイト・イルミネーションの季節・いつの日にか市民参加の祝祭に」(『北海道新聞』夕刊・文化欄、1992年12月27日)
2. 「諸行無常を体現・バーミヤン石仏破壊」(『北海道新聞』夕刊・文化欄、2002年4月9日)

新聞連載

1. 「白楊樹」(『北海道新聞』日曜版、1999年11月1日～2000年6月27日)
2. 「シルクロードの煌めきー中国・美の至宝展から」(『北海道新聞』夕刊、2000年4月19日～2000年4月23日)

新聞記事・展覧会紹介

「魅力あふれるシルクロード文物展」(『日中文化交流 625』(日本中国文化交流協会、2000年4月1日))

歴史読物

「河西回廊 それは密出国から始まった」(『歴史と旅』、秋田書店、2000年12月号・特集 シルクロードと玄奘三蔵の生涯)

活動報告

「東西文明論の再構築・ユーラシア文明論序説ー滞英成果を中心としてー」(『21世紀アジア学研究』第11号、国士舘大学21世紀アジア学会、2013年3月)

エッセイ

- ・「石窟寺院バーチャル参詣」(『在家佛教』2013年4月号)
- ・「慎ましき選手たちの祭典、再びー東京オリンピック随想ー」(『在家佛教』2014年1月号)
- ・「典座との対話ー若き道元の肖像ー」(『在家佛教』2015年1月号)
- ・「どんどやきからパレスチナまで」(『在家佛教』2015年4月号)
- ・「時間追い剥ぎの話」(『在家佛教』2015年7月号)

- ・「お調子者の群像」（『在家佛教』2015年11月号）
- ・「二千年後の宴会風景」（『在家佛教』2016年2月号）
- ・「シールと漢字」（『在家佛教』2016年4月号）
- ・「ハロルドの鎮魂」（『在家佛教』2016年7月号）
- ・「レノンと賢治」（『在家佛教』2016年9月号）
- ・「「星めぐりの歌」と節談説教」（『在家佛教』2016年10月号）
- ・「神々の変容」（『在家佛教』2017年1月号）
- ・「近代主義と二十世紀」（『在家佛教』2017年3月号）

■宮澤賢治関連資料

- 『【新】校本 宮澤賢治全集 第十六卷（下）補遺・資料 年譜篇』筑摩書房、2001年
- 『宮澤賢治年譜』堀尾青史編、筑摩書房、1991年
- 『年譜 宮澤賢治伝』堀尾青史、中公文庫、1991年
- 『新潮日本文学アルバム 宮澤賢治』新潮社、1984年
- 『宮沢賢治——素顔のわが友』佐藤隆房、富山房、1942年初版、1994年新版
- 『新装版 宮沢賢治物語』関登久也、学研、1995年
- 『宮沢賢治 修羅に生きる』青江舜二郎、講談社現代新書、1974年初版
- 『宮沢賢治の見た心象～田園の風と光の中から』板谷栄城、NHKブックス591、1990年
- 『「賢治精神」の実践—松田甚二郎の共働村塾—』安藤玉治、農山漁村文化協会、1992年
- 『【賢治】の心理学—献身という病理』矢幡洋、彩流社、1996年
- 『宮澤賢治殺人事件』吉田司、太田出版、1997年
- 『宮沢賢治とはだれか』原子朗、早稲田大学出版部、1999年
- 『イーハトーブと満洲国——宮沢賢治と石原莞爾が描いた理想郷』宮下隆二、PHP研究所、2007年
- 『ウィリアム・モリスのマルクス主義 アーツ&クラフツ運動を支えた思想』大内秀明、平凡社新書、2012年
- 『近代仏教と青年—近角常観とその時代』岩田文昭、岩波書店、2014年8月
- 『宮澤賢治と法華経——日蓮と親鸞の狭間で』松岡幹夫、昌平齋出版会、2015年3月等。

★賢治を探るキーワードとして、今回は以下のようなものを挙げてみたい：

第一次世界大戦、ヒトラー、ワンダーフォーゲル、フォルケホイスクーレ、国民高等学校、国柱会、加藤寛治、浄土真宗、近角常観、暁烏敏

モリス、ラスキン、ソロー

ロバート・オーウェン（生協元祖、社会改良家）
トルストイ他、ロシア文学

アメリカ、スコットランド、満蒙、北海道～サハリン以遠←銀河鉄道

◆インターネットサイト「宮澤賢治の童話と詩 森羅情報サービス」

<http://why.kenji.ne.jp/>

宮澤賢治のほとんど全作品がネット上で読める。「銀河鉄道の夜」に関しては、その生成過程を辿ることができる。本講で使用するテキストも、これに基づく。

◆最近では、Kindle 等の電子書籍、スマートフォンでも購入、あるいは無料にて購読できる。

1. 導入～宮澤賢治とはどのような人物であったか

★社会的

詩人（「雨ニモマケズ」）

童話作家（「銀河鉄道の夜」）

教育者（花巻農学校教員）

科学者（盛岡高等農林卒業、化学、土壌学、肥料学）

農民啓蒙家（稲作肥料指導、羅須地人協会）

社会活動家（羅須地人協会）

宗教家（浄土真宗、法華経、日蓮宗、国柱会、キリスト教への知識と関心）

⇩シルクロード愛好家

★個人的

病身（肺結核）

短命（37歳）

独身（厭離願望）

父親に反発（家業は質屋、地域財閥）

自己否定的、自己犠牲的（「春と修羅」）

幻想家（『心象スケッチ』）

⇩シルクロード愛好家

★評価

聖人（賢治菩薩）by 谷川徹三

敗北者（挫折の連続）by 中村稔

「賢治は乱反射する」by 吉田司、前掲書

講師のブログとフェイスブックからの抜粋

※賢治の世界を描いた絵で、誰にでも通用するもの、つまり誰でもが「そうだ、このお話にはこれだ」とうなずくものははずさないと言っていい。つまり賢治の文章自体がきわめて絵画的なので、読む人の心におのずからその人その人のみのビジョンを生み出してしまふので、どうしても一般的・普遍的にはなりえないのだ。それは賢治全集の年譜製作者でもある堀尾青史も、つとに述べるところだ。だから結局、具象よりは抽象で表現するしかない。

※それは他のメディアでも同様で、さまざまに表現された賢治像とその作品解釈で、万人に迎えられたものは、ただのひとつもない。だが、賢治とその作品は、万人に迎えられている。ということは、賢治の世界は、一人ひとりのイマジネーションのなかにしか成立しないのだ。それはきわめて個人的な体験なのである。賢治について、文章で、あるいは賢治の残した現物で論ずることはできる。だが、だれもそれを、他人の満足のいくようには表現できないということだ。みな、「自分たちの理解したい賢治」、つまり「自分のやりたいこと」を実践しているだけだ。結局のところ、自分の見たい賢治しか見ていないし、また見ようともしないのである。

★賢治解読のヒント

⇒時代

大枠

日清・日露→列強仲間入り→第一次世界大戦後バブル（民本主義）→関東大震災→世界大恐慌→満州事変（軍国主義）

〈大正時代〉

- 明治と昭和の間
- 第一次世界大戦と第二次世界大戦との間
- バブル経済好況⇔農村疲弊、格差拡大
- 大正デモクラシー、労農運動、 Kommunismus、ファシズム
- 第一次世界大戦の結果による価値観の転倒←総力戦
- 関東大震災以後、大恐慌←現代との対比と類似（東日本大震災、リーマン・ショック、新自由主義経済、格差拡大、世界と東アジア情勢不安）
- ハイカラ・モダニズム
- 新旧キリスト教
- 教養主義仏教・浄土真宗（近角常観、暁烏敏）、行動主義仏教日蓮主義・国柱会
- スピリチュアリズム（精神世界）流行←戦死者の霊の訪れ、西式静坐法（木下尚江）、

佐々木電眼 ※コナン・ドイル⇔東日本大震災の怪談

●タゴール、エスペランティズム、神智学、人智学、日蓮主義…。「世界がぜんたい…」

◎従来、法華経の行者、あるいは清浄な聖人と目され、「編集」されてきた賢治の全体像を、その宗教的ルーツたる浄土真宗（大谷派）および大正時代に蔓延したオカルト要素を排除することなくフラットに論ずる状況と研究世代が、ようやく現われはじめている。★しかしそれは「戦後民主主義時代」の脱構築とも並行する 9.11、3.11、つまり 21 世紀、なかんずく 2010 年代以降の世界と日本に関するフェーズの中で見ていく、重い問題意識と関わると、ますます思われる。

★時代の中の賢治

時代に敏感に反応し、食欲に取り入れつつも、しかしその時代に乗り切れない理由

①理財、経済（父）への無能、違和感、反発

②結核発病

繁栄から置いて行かれた人々、ものごとに目を向ける←自分自身の救済・慰藉でもある理想郷イーハトーヴ

◎これらが無いまぜになって、賢治という「多面的キャラクター」が形成されると考えられる。まさに宮澤賢治は、「時代の子」なのである。時代相というひとつの「文脈、コンテクスト」のなかに宮澤賢治、またその作品を置きながら解読し、考察してみることは、上記からも、一定の意義と意味とを持つと考えられる。

★賢治のキーワード「ほんとうのしあわせ」

人に悲しい顔をさせたくない、人をうれしがらせるためなら自分が犠牲になる

※「ほんとう」←いちばん、究極（by 松岡幹夫、前掲書）

★宮澤賢治略年譜

6月15日 明治三陸地震 (M8.5)・三陸大津波 (38.2m) 発生

1896年 (明治29) 8月27日出生 (戸籍謄本では8月1日)

8月31日 陸羽地震 (M7.2) 発生

◆家業は質屋・古着商。宮澤一族は地域財閥であり大地主。

◆父宮澤政次郎は地域有力者、浄土真宗信者、仏教青年会などを催す地域啓蒙家。

1904年 (明治37) ~1905年 (明治38) 日露戦争

1909年 (明治42) 13歳 岩手県立盛岡中学校入学

1914年 (大正03) 18歳 岩手県立盛岡中学校卒業

1914年 (大正03) 第一次世界大戦勃発

◆岩手病院入院。肥厚性鼻炎の手術。手術後高熱。結核の最初の兆候？

◆岩手山の神に腹を刺される夢を見て回復。以後、心象幻視幻聴能力 (共感覚) を得る。

◆家業を嫌悪、進学希望、父と対立。

◆島地大等編『漢和対照 妙法蓮華経』を読み感動、一夜にして法華経信者となる。

1914年 (大正03) 18歳 盛岡高等農林学校入学

1917年 (大正06) レーニン、ソビエト政府組織

1918年 (大正07) 22歳 盛岡高等農林学校卒業 研究生となる

1918年 (大正07) 第一次世界大戦終結

◆江刺郡地質調査・稗貫郡土性調査に従事。

◆12月、日本女子大学在学中の妹敏子病臥。看病のため上京、翌1919年2月に帰郷。

◆上京を機に独立計画。人造宝石業、炭焼乾溜、海草灰利用などの構想。父の反対で挫折。

◆家業を嫌悪、親友保阪嘉内と文通。

1920年 (大正09) 24歳 盛岡高等農林学校研究生修了

1920年 (大正09) 24歳 国柱会信行部入会

◆パンフレット配布、掲示板設置などの布教活動。

◆国柱会は田中智学設立の日蓮主義・国家主義在家信徒宗教団体。会員に石原莞爾あり。

1921年 (大正10) 25歳 東京出奔 国柱会奉仕活動

◆和解を求める父と伊勢・奈良・京都旅行。

◆妹敏子病報を受け帰郷。

1921年 (大正10) 25歳 12月、稗貫郡郡立稗貫農学校教諭

◆1922年 (大正11) 11月27日、妹敏子死去。

1922年 (大正11) ムッソリーニ、ファシスト内閣成立

1922年 (大正11) ソビエト連邦成立

1923年（大正12）ヒトラー、ミュンヘン一揆

1923年（大正12）関東大震災

1924年（大正13）28歳 心象スケッチ『春と修羅』イーハトヴ童話『注文の多い料理店』

1925年（大正14）普通選挙法・治安維持法

1926年（大正15）30歳 岩手国民高等学校で「農民（地人）芸術概論」講義

◆岩手国民高等学校は農本主義者加藤完治の設立した日本国民高等学校に範を取り、この年のみ実施された。加藤完治は満州殖民を意図し、茨城県に満蒙開拓内原訓練所を設け、満蒙開拓義勇軍を送り出した。訓練生は「日輪舎」という宿舎で共同生活を送った。

1926年（大正15）30歳 3月、岩手県立花巻農学校退職

◆農学校「精神歌」作詞、学校劇上演、詩、童話製作など教育・芸術的活躍。

1926年（大正15）30歳 宮澤家別宅に独居自炊、羅須地人協会設立

◆農民啓蒙活動（講義、レコードコンサートなど）、肥料設計指導、労農党への協力、一方で満蒙への憧れあり。

1927年（昭和02）31歳 盛岡高等農林農学別科生松田甚次郎来訪

◆松田甚次郎は山形県の人。著書『土に叫ぶ』。賢治に「小作人たれ」と言われて実践し、農民劇を上演、1928年（昭和3）には加藤完治の設立した日本国民高等学校に学ぶ。最上共働村塾を設立、農村問題解決に奔走するが1943年（昭和18）に力尽き、弱冠34歳で死去。むしろ賢治の理想の実践者は、この松田甚次郎といえよう。

1928年（昭和03）32歳 秋～冬以降、急性肺炎で病臥

1929年（昭和04）33歳 東北砕石工場社長鈴木東蔵来訪、以後さまざまアドバイスする

1929年（昭和04）世界大恐慌

1930年（昭和05）34歳 ほぼ健康回復

1931年（昭和06）35歳 東北砕石工場嘱託技師となる

◆鈴木東蔵は自社で生産する石灰岩抹を肥料および搗粉として売り込むことを考え、賢治にアドバイスを仰ぎ、かつ宮澤家より資金援助を受けた。賢治は実際にはセールスマンとして宮城県、秋田県まで足を伸ばして各地の県会や組合、農家、商店を訪問して歩いた。さらに賢治は農閑期の対策として壁砂・壁材生産を考え、鈴木は東京方面での販路開拓を賢治に依頼、賢治はサンプルを作成させて上京する。

1931年（昭和06）9月18日 満州事変

1931年（昭和06）35歳 9月20日上京、投宿と同時に発熱、28日帰郷、そのまま病臥

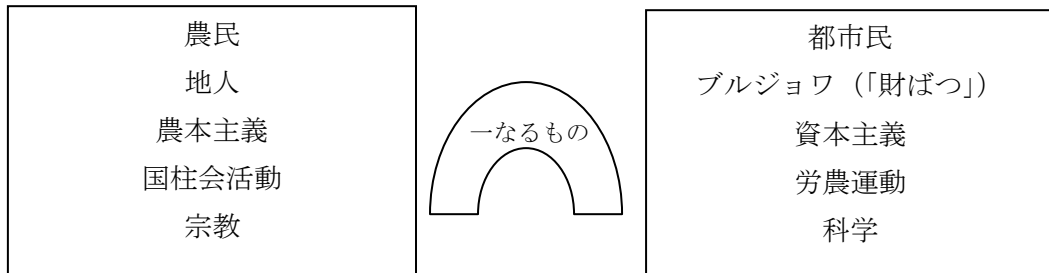
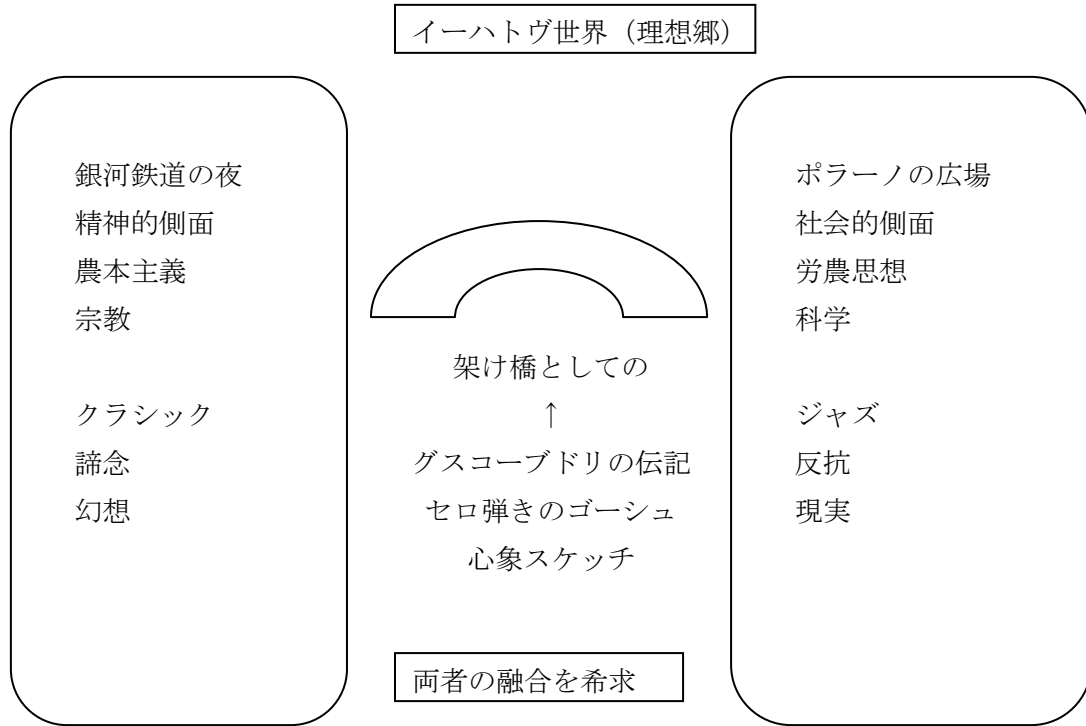
◆以後は家を出ることなく療養。

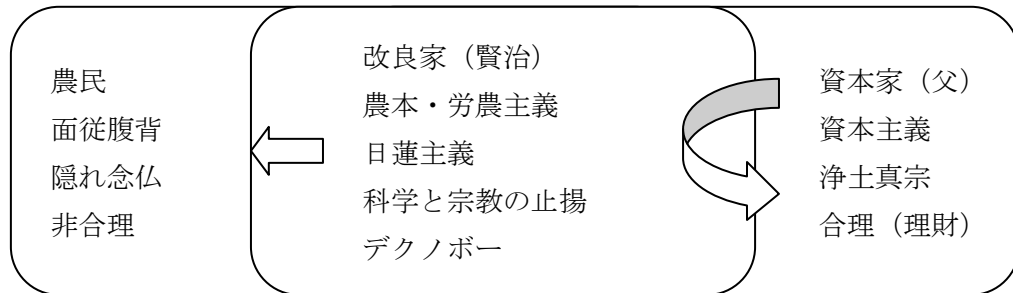
◆「雨ニモ負ケズ手帳」メモ。

1932年（昭和07）3月1日 満州国建国

1933年（昭和08）37歳 9月22日死去

2. 賢治の二面性





行きたいが行けない

引き寄せられる

よだか・土神
ジョバンニ
ジョン・レノン

きつね
カムパネルラ
ポール・マッカートニー

☆ Nowhere man としての賢治 —— Giovanni は偶然にも John である

つねに背後にあるもの

孤独感、疎外感、ルサンチマン→なぜ世に出られないか
越えられぬもの→父（身分と育ち）、結核

教育+実践

父への対抗心
浄土真宗、日蓮主義、キリスト教
花巻農学校と羅須地人協会
イーハトヴと満蒙
国柱会、国民高等学校（グルントヴィのフォルケホイスコーレ）、労農運動

◎明治教養主義青年に新たな息吹を与えた近角常観、暁烏敏は、賢治やトシ等、第一次世界大戦後の世代には、「19世紀に完成された市民的モダニズム」としての権威、因習、父、桎梏でしかない

参考：「復活の前」抜粋

暁烏さんが云ひました「この人たちは自分の悪いことはそのけで人の悪いのをさが

し責める、そのばちがあたってこの人たちは悲憤こう慨するのです」
功利主義の哲学者は永い間かゝって自分の功利的なことを内観し遂げました。これ実に人類の為におめでたいことではありませんか

※アジアにアメリカを作りたかった賢治、完治、莞爾

※労農ロシアではなくアメリカでアメリカに対抗する

※草野心平の逸話、ドヴォルザーク、インデアン、植物医師、賛美歌、「ビューティフル・サッポロ」

※このころ（講師注、1926 年末～1927 年初、賢治花巻農学校勤務末期）草野の知識では、賢治というのはアメリカ式の農場を経営し、念仏を唱え、ベートーヴェンをきき、詩をつくるといった、ふしぎな人物で、草野はなんどかこの農場で働かしてもらおうかと考えたそうである。（堀尾青史『年譜 宮澤賢治伝』中公文庫、1991、226 頁）

※夜は（中略）一同は電車によりて中島公園に至る。。一同は電車によりて中島公園に至る。途中の街路樹花壇星羅燈影等「ビューティフル サッポロ」の真価は夜に入りて更に發揮せられたり。（中略）北海道石灰会社石灰岩末を販るあり。これ酸性土壤地改良唯一の物なり。米国之を用ふる既に年あり。内地未だ之を製せず。早くかの北上山地の一角を砕き来りて我が荒涼たる洪積不良土に施与し草地に自らなるクローバーとチモシイとの波をつくり耕地に油々漸々たる禾穀を成ぜん。（「修学旅行復命書」）

（下線引用者）

★賢治の理想郷→イーハトーブ（ユートピアとしての岩手県）

より具体的には、小岩井農場（彼の幻想が最も湧き出でる場所、英国風、牧草地、酪農）

※じつは西域シルクロードとも重なる

◎ただし、現実の小岩井農場は岩崎・三菱財閥所有（資本家・管理職員・農業労働者）。賢治はこれを生産から販売まで、農民が奪還し、協同組合とすることを理想とした。これが、「ポラーノの広場」である。★これは労農主義的理想から、戦時ファシズムの国家産業統制、そして戦後 JA にまで、一直線につながる。

おれたちはみな農民である ずるぶん忙しく仕事もつらい

もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい

われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あった

近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直感の一致に於いて論じたい

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する

この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある
(農民芸術概論綱要・序論)

「さうだ、諸君、あたらしい時代はもう来たのだ。この野原のなかにまもなく千人の天才がいっしょに、お互に尊敬し合ひながら、めいめいの仕事をやって行くだらう。ぼくももうきみらの仲間にはいらうかなあ。」
(「ポラーノの広場」削除部分)

ここに多くの解放された天才がある
個性の異なる幾億の天才も並び立つべく斯て地面も天となる
(農民芸術概論綱要・序論)

あゝ誰か来て私に云へ億の天才ならんで生れ
しかも互ひに相犯さない
あかるい世界はかならず来ると
(三一三 産業組合青年会 下書稿 (二) 第一形態) 一九二四、一〇、五

※参考文献：「宮沢賢治と「産業組合」——「イーハトーヴォ」が目指したもの」(大内秀明、『変革のアソシエ』No. 27、2017. 1、社会評論社所収)

3. 大正時代と20世紀アヴァンギャルドとしての賢治

世界がぜんたい……
火と鉄の僧院に……

★ヒトラーと賢治

自立しえぬ二人、父（近代合理の権化）からの抑圧
賢治の父は理財家、地域ブルジョワ、浄土真宗
ヒトラーの父は小市民、小官吏、(ただし宗教は厳格なカトリック)
この二人は、おそらく「神と個で接しうる強靱さ」を持つ
賢治はそれを持たない。もしも近代的自我を確立し持っていれば、法華経世界と日蓮主義救世思想に傾倒しない
ヒトラーもまた。もしも近代的自我を確立し持っていれば、ウィーンでボヘミアンにならず、独身者宿泊所にも入らぬ

☆西歐的自我（個我）は、グーテンベルク印刷術、産業革命による画一化により、聖職者をクッションとする教養独占的、ラテン世界国家的カトリシズムよりも、かえって「普遍性」を獲得している。誰でも持てる「人権」「尊厳」、誰でもわかる「教育」つまり「民主」がそれである。他方、これが国民国家の基盤たる合理主義的徴兵にもなりうる（「標準」という鑄型にも嵌める）。浄土真宗仏教青年会パンフレット活動はまさにこれに近い。いわば第一世代の大衆化であり、それはフランス第二帝政、第三共和制に淵源を持つ（ヒトラーの父のカトリシズムは、厳格な規範強制という意味合いでは、プロテスタンティズムに近いのではないだろうか）。そしてこれが、明治国民国家形成の希求でもある。福沢諭吉、渋沢栄一、近角常観、内村鑑三

★ところがこうした19世紀風近代自我（市民、小市民）は、第一次世界大戦で戦車と塹壕に刈り取られ、毒ガスでしなびて脆くも潰える

- 戦争がヒトラーを水を得た魚にする
（一なるものへの奉仕、同一化、投影）

毒ガスによる啓示

- 賢治の「飢餓陣営」
（塹壕の廢墟の中からの一なるものへの啓示）

★賢治はこれに直面・直視（かれはすでに次世代的な人格としてあらわれる。世紀末的/20世紀的、第二世代の大衆化、賢治がアメリカ20年代好きなのもそれで説明がつく）ヒトラーもまた。SA（突撃隊）は非常にモダンなファッション、反カノン（儀軌）。当時、軍服にネクタイは異例。ヒトラーはデザイナー志向、かれのジャケットを見ればそのことは分かる。賢治も美術には異様な才能あり。先取りの二人、ハイカラな二人。ゴシックモダニスト、バロックモダニスト

◎戦後の価値観の完全なる転倒。二人はあらたな「父」を求める

※ベトナム戦争後に近い

ヒトラーとハーケンクロイツ、賢治と日輪←加藤寛治の日輪舎
ワンダーフォーゲルとイーハトーヴ野山彷徨
死に取り憑かれた二人

戦が始まる、こゝから三里の間は生物のかげを失くして進めとの命令がでた。私は剣で沼の中や便所にかくれて手を合せる老人や女をズブリズブリとさし殺し高く叫び泣きながらかけ足をする。（「復活の前」）

(下線引用者)

黒溝台

曹長A 上等兵B 一等卒C

上等兵D、

第一場 夜、A斥候より帰る。敵の遺棄したる酒樽あり 齎し来れ」
とBに命ず。B抗辯す。結局持ち来る。みな酔ふ。中隊長
巡視。軍医。

第二場 午后

第三場 夜

兵等或は衣を繕ひ或は手簡を記す。

会談、

消燈

C、歩哨に立つ。東方に向て祈る。遙に子らの遊び歌へる
声。その声やがて敵陣の軍歌或は俚謡たるを知る。

遠方にて斥候戦と思はるゝ銃声次第に拵がり烈しくなりて
遂に全線の戦闘となる。

「こんな馬鹿げた戦闘があるか。

こんな馬鹿げた戦闘があるか。」

第七場 会戦X日

惨憺たる敗軍、

前幕中の主なる人物影既になし

破損せる屋壁、

一等卒C、上等兵B、壁によりて死守す。負傷す。

C、「いまここでかうしてゐるのはおれの幽霊でないか。」

「そんな縁起でもないことを云ふな それぶて、ぶて。」

死者より弾丸をとりて打つ、

C、幻覚的となる

「もう大丈夫だ。わが軍の勝利だ。万歳、第A旅団が敵を
背後から包囲したぞ。」

「馬鹿云ふな、しっかりしろ。第A旅団は旅順と南山で全
滅してるんでないか。」

「万歳、第D聯隊もだ。わが……」死す。

敵自ら退く。追撃令下る。

バナナン大将の行進歌

(「飢餓陣営」の歌(四))

いさをかゞやくバナナン軍
マルトン原にたむろせど
荒さびし山河のすべもなく
飢餓の陣営日にわたり
夜をもこむればつはものの
ダムダム弾や葡萄弾
毒瓦斯タンクは恐れねど
うゑとつかれをいかにせん
やむなく食みし將軍の
かゞやきわたる勲章と
ひかりまばゆきエボレット
そのまがつみは録〔しる〕されぬ
あはれ二人のつはものは
責に死なんとしたりしに
このとき雲のかなたより
神ははるかにみそなはし
くだしたまへるみめぐみは
新式生産体操ぞ
ベース　ピラミッド　カンデラブル
またパルメット　エーベンタール
ことにも二つのコルドンと
棚の仕立にいたりしに
ひかりのごとく降〔くだ〕り来し
天の果実をいかにせん
みさかえはあれかゞやきの
あめとしめりのくろつちに
みさかえはあれかゞやきの
あめとしめりのくろつちに
(下線引用者)

一〇五六

〔サキノハカといふ黒い花といっしょに〕

サキノハカといふ黒い花といっしょに
革命がやがてやってくる
ブルジョアジーでもプロレタリアートでも
おほよそ卑怯な下等なやつらは
みんなひとりで日向へ出た蕈のやうに
潰れて流れるその日が来る
やってしまへやってしまへ
酒を呑みたいために尤らしい波瀾を起すやつも
じぶんだけで面白いことをしつくて
人生が砂っ原だなんていふにせ教師も
いつでもきよろきよろひとと自分とくらべるやつらも
そいつらみんなをびしゃびしゃに叩きつけて
その中から卑怯な鬼どもを追ひ払へ
それらをみんな魚や豚につかせてしまへ
はがねを鍛へるやうに新らしい時代は新らしい人間を鍛へる
紺いろした山地の稜をも砕け
銀河をつかつて発電所もつくれ
(下線引用者)

髪を長くしコーヒを呑み空虚に待てる顔つきを見よ
なべての悩みをたきぎと燃やし なべての心を心とせよ
風とゆききし 雲からエネルギーをとれ (農民芸術概論綱要)
(下線引用者)

花巻農学校精神歌

(一) 日ハ君臨シ カガヤキハ
白金ノアメ ソソギタリ
ワレラハ黒キ ツチニ俯シ
マコトノクサノ タネマケリ

(二) 日ハ君臨シ 穹窿ニ
ミナギリワタス 青ビカリ
ヒカリノアセヲ 感ズレバ
気圏ノキハミ 隈モナシ

(三) 日ハ君臨シ 玻璃ノマド
清澄ニシテ 寂カナリ
サアレマコトヲ 索メテハ
白聖ノ霧モ アビヌベシ

(四) 日ハ君臨シ カガヤキノ
太陽系ハ マヒルナリ
ケハシキタビノ ナカニシテ
ワレラヒカリノ ミチヲフム

われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である
われらの前途は輝きながら険峻である
(両行とも「農民芸術概論綱要」より抜粋)

『アドルフ・ヒトラー 1』(ジョン・トーランド著、永井淳訳、集英社文庫、1990年4月)
第三章 6節 「狂気と感激に圧倒されて」163頁～165頁

ベルリンでは、ローマ人に対する反乱を率いた奴隷の名に因んだ極左グループ、スパルタクス団が、反乱水兵の助けを借りて革命を起こすべく街頭に進出していた。これはのんびりしたミュンヘンの蜂起とは別物だった。クリスマス・イヴには首都はアナーキーの寸前にあった。ほかの都市も、ベルリンほどドラマティックではないにしても、これにならない、ドイツ全土で軍隊と警察組織が崩壊しはじめていた。

軍隊と警察の権威が消滅するにつれて、新しい勢力が突如として姿を現わした——それは義勇兵団として知られる現象で、共産主義者からドイツを護るというヒトラーと同じ情熱を持つ、軍隊出身の理想主義的な活動家たちの団体だった。ヒトラーと同じ時代に生まれたドイツの世代のなかから発生した義勇兵団は、それ以前の二つの体験によって今日の活動にそなえていた。まず戦前の青年運動、ワンダーフォーゲル(渡り鳥)があった。これらの青年たちはしばしば色彩豊かなコスチュームを身にまとって、新しい生活様式の探求のために国じゅうを放浪して歩いた。大部分は裕福な中流家庭の出身で、彼らを生んだリベラルなブルジョワ社会を軽蔑し、「親たちの信仰は大体においてインチキであり、政治は大袈裟だが浅薄で、経済は無節操で欺瞞的、教育は型にはまって生命力を失い、美術は無価値でセンチメンタル、文学は偽善的で商業主義に毒され、演劇は安っぽくて機械的である」と信じていた。

彼らは家庭生活を抑圧的で偽善的なものとみなした。また男女の関係も、既婚未婚を問

わず、「偽善に毒されている」と感じた。彼らの目的はブルジョワ社会の三位一体、学校、家庭、教会と戦うために、新しい青年文化を確立することであった。

彼らは指導者の指揮のもとにキャンプファイヤーを囲んで、『海賊の歌』を歌い、「森からのメッセージ」を聞くために無言でキャンプファイヤーをみつめたり、仲間の一人がニーチェやシュテファン・ゲオルゲの著作から選んだ一節を朗読するのに耳を傾けたりした。そのシュテファン・ゲオルゲはこう書いている。「民衆と至高の叡智は人間を熱望する！——実践を熱望する！……おそらく何年も諸君の殺人者たちの間に坐り、諸君の牢獄で眠っているだけだが、ある日立ちあがってその実践におよぶだろう」神秘主義を糧とし、理想主義を原動力とするこれらの青年たちは、行動を熱望していた——いかなる種類の行動でもよかった。

彼らは大戦のなかにそれを発見した。おそらく彼らがヒトラーと同じように祖国の大義を確信していたのはそのためだろう。塹壕生活は兵士と将校を、苦難と血から生まれた兄弟愛のなかでよりいっそう近づけた。兵士たちは決死的な白兵戦の先頭に立つ将校を尊敬した。「彼らにとって、彼は指揮官ではなく、指導者であった！そして彼らは彼の盟友であった！彼らは彼を盲目的に信頼し、必要とあれば地獄までも従って行く覚悟だった」彼らはそれまでのドイツでは知られていなかった一種の民主的前線関係を作りあげた。何マイルも続く塹壕は外界から隔離されて、「焰の壁を持つ僧院」と化した。

(下線引用者)

『フェルキッシュ革命』抜粋

『フェルキッシュ革命 ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』（ジョージ・L・モッセ著、植村和秀/大川清丈/城達也/野村耕一訳、柏書房、1998年10月）

前線での兵士たちの経験は、以下のような考え方を強めた。つまり、共通の精神で互いに結び付き、ともに彼らの血を流した男性のブントが、破局の後に残った社会組織の唯一の確かな形態であるというものである。戦争の経験とそれが意味したことは、その表現方法をすぐに文学に求め、そのようにして形成された闘争のイメージは、その主題に関する、より若い世代の思考に影響を与えた。こうした雰囲気をつくった最も著名な二つの文学的貢献は、フランツ・シャウヴェッカーとエルンスト・ユンガーによるものである。シャウヴェッカーは、後にナチスのお気に入りの作家の一人となったが、彼は戦争で染み込んだ共同感情を「国民をじかに経験すること」だとうまく評した。彼は次のように書いている。「われわれはわれわれの血が、生ける大地を濡らすのを見た。この大地にわれわれは二百万人の同胞を葬った。われわれはもとに戻り、国民を経験したのだ。破壊があるところのみ、そのような奇跡の天啓もありうるのである」。血、残虐行為、破壊という同じ現象は、エルンスト・ユンガーの著作でも着想を与えている。敵対関係を、忍耐力と人格的強さと国民的遺産とに対する試練として表現することは、彼によるものである。彼の本

『^{イン・シュテールグワイツテルン}鋼鉄の嵐の中で』(一九一九年)は、炎の洗礼をものとしめない突撃部隊を賞賛し、彼らを^{ネイション}国民の真の貴族と呼んだ。どちらの作家も、彼らの作品を描く際に、人々の間の争いを賛美した。つまり、彼らは戦争とそれに続く出来事で混乱した若者たちの着想の源となつたし、戦争の精神を呼び起こすことによつてのみ、民族のいっそう大きな栄光の復活の中で、若者は、自己のアイデンティティを回復するであろうということ、彼らに信じさせたのである。

(第12章 諸組織の進展、287頁、下線引用者)

ヴレは、彼の政治的経歴を通してフェルキッシュ的信条に忠実であり続けた。かなり後になって一九三一年でも、彼の重要な理論的著作である『^{デー・ゼンドウング・デス・ノルデンス}北方人の使命』の中で彼は、ラガルドとラングベーンの着想にまだ誠実に謝意を表し、それを分かりやすく言い換えて、「罪の汚れないドイツ人は貴族であり、その祖先は農民だった」と述べた。彼が頑なに信奉したフェルキッシュの諸原理によれば、農民は^{フォルク}民族の最も生命力ある生き物であり、^{ネイション}国民は地上とコスモスとの精神的交渉へと再び献身すべきだということであった。こうした神秘的な宗教的強調は、フェルキッシュ運動全体の同様の考え方を反映しているが、後年のヒトラーや外来神学であるカトリックに対する、彼の対立を説明しているのである。

(第12章 諸組織の進展、291頁、下線引用者)

『春の祭典』抜粋

『春の祭典——第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』(モーリス・エクスタインズ著、金利光訳、TBSブリタニカ、1991年7月)

俺たちかい？ 打って一丸、燃えてるよ

俺たちや新しい人間、死が勇気を吹き込んでくれるのさ(6)

原注 ” Fünf Gesänge” in Thomas Anz and Joseph Bogl (eds.), Die Dichter und der Krieg: Deutsche Lyrik, 1914-1918 (Munich, 1982), 31-32.

私たちは強くなれる。ここでの生活はあらゆる弱さと感傷を根こそぎ吹き飛ばしてくれる。束縛され、自分自身の意志を奪われ、苦しい試練に耐えながら自己抑制と自己修養を身につけるのだ。そのことにより、私たちなによりももまず自己の内面をみつめるようになる。人が殺されていく戦場、恐怖に取り囲まれた戦場での生活を耐えられるかどうかは自己の精神をより高められるか否かにかかっている。ここでは否応なしに自己凝視を迫られ、死をも甘んじて受け入れなければならない。私たちは身の毛もよだつ現実との釣合いを取るため至高の気高さを求めようとするのだ(30)。(276頁)

原注 Letter, April 16, 1915, in Witkop (ed.), Kriegsbriefe (1916), 49-51.

一九四五年に連合国の軍隊が暴いた光景は一九三三年のはじめに起こった一連の出来事の不可避的結末とはいえないが、十分に予測された結末ではあった。ナチズムは非合理主義と技術主義の交配から生じたモダニストの衝動が生み落としたもののひとつである。ナチズムは政治運動であったにとどまらず、文化的噴出でもあった。それはまた少数の人間が押しつけたものでなく、大衆の間に発現したものであり、生存の危機感にせきたてられ、謙遜も節度も——さらには現実さえも——かなぐり捨てた現世の理想主義の極致であった。境界も限界も無意味となり、ついには自己完結したこの理想主義が陶然として人肉食いに変じたのだ。理想主義として出発したはずのものがニヒリズムに変わり、祝福が災い、生が死となって結末を迎えたのである。

ナチズムを反動的運動と解釈する者は多い。(たとえばトーマス・マンが述べたように) 彼らはナチズムを、幸福な農民が茅ぶき屋根の家に住むような牧歌的社会をめざす〈好古趣味の爆発〉とみるが、その実、(復古主義の衣はまとっていたにしろ) この運動を推進したのは強烈な未来への志向であった。ナチズムは〈素晴らしい新世界〉をめざし、未来へとまっさかさまに飛び込んでいった。もちろん保守的なユートピアへの憧れを最大限に利用し、そのロマンチックな幻想に敬意を表しつつドイツの過去のイデオロギーを身にまといはしたが、ナチズムのめざすところは際立って革新的であった。それは過去と未来を等分にみつめるヤヌス神でもなければ、変幻自在に姿を変える現代のプロテウス神でもなかった。ナチズムは新しいタイプの人間を創造し、それによって新たな道徳と社会システムを生み出し、さらには新しい国際秩序を生み出すことをめざした。ナチズムだけではない、それはあらゆるファシズムがめざしたものでもあった。オズワルド・モズリーはイタリアを訪れてムッソリーニに会ったあところ書いている。「ファシズムは新しい統治システムを作り出しただけでなく、新しいタイプの人間をも生み出した。古い世界の政治家には彼らがまるで異星人のようにみえるだろう」(5)。ヒトラーは繰り返し語ったものだ——国家社会主義は政治運動にとどまるものでもなければ、単なる信念でもない。それは新しい人類を創造しようとする願望なのだ、と(6)。(409頁)

原注(5) In Colin Cross, *The Fascists in Britain* (London, 1961), 57.

原注(6) Hermann Rauschning, *Hitler Speaks* (London, 1939), 242.

重要なのは理念であり、主張し、征服し、勝利し、闘う行為であり、戦争におけるおなじあのダイナミックな生活である。さらに重要なのはこのダイナミズムを妨げるあらゆる障害物——物質主義者、空論家、虚弱者、優柔不断な者——を抹殺し除去することであった。伝統的道徳観——ブルジョワや奴隷の道徳観と等しいもの——は若者を鍛錬する未来の溶鉱炉ではなんの役割も果たさない。私の教育は情け容赦ない、とヒトラーはしばしば語ったものだ。彼は青少年を暴力的で冷酷な人間、世界を震撼させる人間に育てようと

願っていた。彼らは一切の束縛から——猛獣のように——自由になるだろう。彼らは数世紀にわたる馴化^{じゆんか}や隷属のなごりの一切を消し去る者たちなのだ。(414 頁)

(下線引用者)

宮澤賢治に関する中沢新一の発言抜粋

『哲学の東北』(中沢新一、幻冬舎、1998 年 8 月、36-41 頁)

中沢 そうですね。それに機械の問題がからんでいます。大きな望遠鏡が発明されたり大きな動力をうごかせる蒸気機関や原動機が作られてきた時代です。アヴァンギャルド的な傾向をもった人たちは、それをメシアニズムと結びつけて、機械が世界を変えていくという観念を生んだ。二十世紀初頭の人たちがなぜあんなに世界を変革することにひかれたかの謎は、このへんにひそんでいる。

中沢 社会主義の人たちも、レーニンみたいに機械によって世界が変えられると考えていた。国柱会の田中智学の思想だって、世界を変える思想です。賢治はレーニンと田中智学の間に立っています。レーニンは電化によってソビエト・ロシアを建設しようとした。田中智学は精神の浄化によって、東亜の国家を建設しようとした。賢治はレーニンと智学の中間にいます。機械に対するメシアニズム的な信仰、それで世界を変えうるものだという強い意識があります。

中沢 はい。工房が成り立ちうる時代は、世界がまだ透明な時代です。十九世紀になってきますと、世界は迷宮化しはじめ、とてつもないエネルギーが出現してきます。蒸気機関です。スピードがアップして、扱っている道具自体が時計みたいに身近なものではなくなってくる。

中沢 統御できない力が入ってくる。それからもうひとつ、人間のエロスを統御していた社会機構が、フランス革命以後混乱しはじめます。フェミニズムの問題が出てくるし、統御できない無意識のエロティシズムが社会の前面に出てきはじめた。その混乱の中からしだいに二十世紀的なものが形成されてくる。宮澤賢治の時代はそういう過渡期にあるのです。大正から昭和初期、ヨーロッパでは二十世紀の初頭、第一次大戦と第二次大戦の間の時代です。

その時代に第四次元の世界が、なぜ出現してきたか。それは第三次元の中までは拡大してくる力を抑えられないという意識があったからです。この現実世界を超えた超越的な世界で、人間の世界をもう一回透明なものにしようという努力がなされる。その政治的な人たちがロシア革命だと思います。それは宮澤賢治のエロスの問題や国柱会の問題なんかとつながってくる。ヨーロッパでは拡大してくるエネルギーやエロスの問題をどうやって解

決したか。それはナチズムです。このナチズムと田中智学のイデオロギーは近いところがあります。

(下線引用者)

◎改革浄土真宗は「古い父」であり、もはや訴えかけない。旧教、新教、無教会派も難しいかもしれない。

4. 賢治の疎外感

★「私はこの世に放り込まれてきた」

★業の解消のため、修行のため、鍛えられるため←そのエネルギーは銀河回転のダイナモ
真の親は前世、あるいは来世にいる。

[峯や谷は]

峯や谷は無茶苦茶に刻まれ私はわらじの底を抜いてしまってその一番高いところから又低いところ又高いところと這ひ歩いてみました。雪がのこって居てある処ではマミと云ふ小さな獣〔ケモノ〕の群が歩いて堅くなった道がありました。

この峯や谷は実に私が刻んだのです。そのけわしい処にはわが獣のかなしみが凝って出来た雲が流れその谷底には茨や様々の灌木が暗くも被さりました。雨の降った日にこの中のほゝの花が一斉に咲きました。

けはしくも刻むこゝろのみねみねにさきわたりたるほゝの花はも。又、

こゝはこれ惑ふ木立のなかならず忍びを習ふ春の道場。

ほゝの花は白く山羊の乳のやうにしめやかにその蕊は黄金色に輝きます。

この花をよろこぶ人は折って持って行っても何にもなりません。この花をよく咲かせやうと根へ智利硝石や過燐酸をやっても何にもなりません。

◎われは誓ひてむかしの魔王波旬の眷属とならず、
又その子商主の召使たる辞令を受けず。

(下線引用者)

夜

一九二九、四、二八、

これで二時間

咽喉からの血はとまらない

おもてはもう人もあるかず

樹などしづかに息してめぐむ春の夜

こゝこそ春の道場で

菩薩は億の身をも棄て ※億の天才

諸仏はこゝに涅槃し住し給ふ故

こんやもうこゝで誰にも見られず

ひとり死んでもいゝのだと

いくたびさうも考をきめ

自分で自分に教へながら

またなまぬるく

あたらしい血が湧くたび

なほほのじろくわたくしはおびえる

(下線引用者)

ひかりの素足

「僕たちのお母さんはどっちに居るだろう。」檜夫が俄かに思いだしたように一郎にたずねました。

するとその大きな人がこっちを振り向いてやさしく檜夫の頭をなでながら云いました。

「今にお前の前のお母さんを見せてあげよう。お前はもうここで学校に入らなければならない。それからお前はしばらく兄さんと別れなければならない。兄さんはもう一度お母さんの所へ帰るんだから。」

(下線引用者)

銀河鉄道の夜

あゝ、あすこの野原はなんてきれいだらう。みんな集ってるねえ。あすこがほんたうの天上なんだ。あつあすこにゐるのぼくのお母さんだよ。カムパネルラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

(下線引用者)

よだかの星

(ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのたゞ一つの僕

がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。あゝ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死なう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだらう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向ふに行ってしまう。)

(下線引用者)

[143] 1919年4月15日 成瀬金太郎あて 葉書

南洋東カロリン群島ポナペ島 南洋拓植工業会社内 成瀬金太郎様

四月十五日 花巻川口町 宮澤賢治

御便りありがたう存じます。

お変わりもなく何とも結構に存じます。

今度の巴里の会議では、その島はこのまま日本に止まることは勿論でせう。

私は暗い生活をしてゐます。うすくらがりのなかで遙に青空をのぞみ、飛びたちもがきかなしんでゐます。

あなたが感ずる様に暗黒の時代は近いかもしれません。その暗黒のただなかをまっすぐに通り抜け、かがやきの国に立ってふりかへって暗黒の国の壁を破るひとはあなたの様にめまひのする様なはげしいところで力をつくりあげるのでせう。

(下線引用者)

雁の童子

須利耶さまが歩きながら、何気なく云われますには、

(どうだ、今日の空の碧いことは、お前がたの年は、丁度今あのそらへ飛びあがろうとして羽をばたばた云わせているようなものだ。)

童子が大へんに沈んで答えられました。

(お父さん。私はお父さんとはなれてどこへも行きたくありません。)

須利耶さまはお笑いになりました。

(勿論だ。この人の大きな旅では、自分だけひとり遠い光の空へ飛び去ることはいけないのだ。)

(いいえ、お父さん。私はどこへも行きたくありません。そして誰もどこへも行かないでいいのでしょうか。) とう云う不思議なお尋ねでございます。

お父さん。お許し下さい。私はあなたの子です。この壁は前にお父さんが書いたのです。

(私共は天の眷属でございます。罪があつてただいままで雁の形を受けて居りました。只今報いを果しました。私共は天に帰ります。ただ私の一人の孫はまだ帰れません。これはあなたとは縁のあるものでございます。どうぞあなたの子にしてお育てを願います。おねがいでございます。)と斯うでございます。

(下線引用者)

◎須利耶主はK一賢治。雁の童子はスタイン発見の、現中国新疆ウイグル自治区ニヤ遺跡壁画中のヘレニズム仏教天童子。つまりこの父は賢治。あらまほしき父、つまり自分。そして雁の童子もまた賢治の自己投影。

◎だからかれは言う…

私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過つて身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについたものででもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しみ、同輩を嘲り、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却つて完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かゞ空しく過ぎて漸く自分の築いてみた蜃気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従つて師友を失ひ憂悶病を得るといったやうな順序です。

(中略)

上のそらでなしに、しっかり落ちついて、一時の感激や興奮を避け、楽しめるものは楽しみ、苦しまなければならぬものは苦しんで生きて行きませう。

([488]1933年9月11日 柳原昌悦あて 封書)

(下線引用者)

ミンナニデクノポートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

さて虔十はその秋チブスにかかつて死にました。(「虔十公園林」)

5. 終わりに

みんながめいめいじぶんの神さまがほんたうの神さまだといふだらう、けれどもお互ほかの神さまを信ずる人たちのしたことでも涙がこぼれるだらう。

まさしきねがいに いさかうとも
銀河のかなたに とともにわらい
なべてのなやみを たきぎともしつつ、
はえある世界を ともにつくらん

Imagine there's no countries

It isn't hard to do

Nothing to kill or die for

And no religion, too

Imagine all the people

Living life in peace

You may say I'm a dreamer

But I'm not the only one

I hope someday you'll join us

And the world will be as one

